

頭山満とアジア主義

嵯 峨 隆

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第11巻第1号（2012年9月）抜刷

【論文】

頭山満とアジア主義

嵯 峨 隆

1 はじめに

本稿は頭山満（1855～1944）とアジア、取り分け中国との関わりを、思想と行動の側面から分析し、その特徴を考察するものである。

頭山満は明治・大正・昭和にわたって政治的影響力を持った国権主義者にしてアジア主義者である。しかも彼は、如何なる公職についたこともない、生涯「無位無官」の浪人であった。だが、宮崎滔天のような他のアジア主義者と比べて、頭山に対する評価は決して高いとは言えない。さすがに、彼をヒトラー型人間とするが如き極端な評価¹は今日では見られないとはいえ、アジア・太平洋戦争に対する精神面・世論面で大きな役割を果たしたとする見方は今日でもなお一般的である。本稿は、そうした一般的評価を前に、頭山の革命的再評価を企てるものではない。しかし、これまで投機的な側面ばかりが強調されてきた孫文との関係などは、彼の思想と行動を再検討することによって、より実態に近いものが見えてくるのではないかと考えている。

然るに、頭山満を含めて日本の国権主義的アジア主義者の思想性については、その存在自体を疑問視する見解さえある。例えば、ある論者は次のように述べる。「頭山満も内田良平も、時事評や政略論、精神論は盛んに講じていても、後世に残るほどの思想を提示していない。いや正確に言うならば、彼らは意図的に思想を構築することを放棄していた。彼らは『思想』というものに対して、積極的に無頓着たろうとしていた²。確かに、頭山は生前に体系だった著作を発表したわけではなく、その言説は周辺の人物が記録して残したものでしかない。また、彼にまつわるエピソードは数多く残されているものの、そのエピソードなるものは所詮管見であって、容易に全体像を窺わせるものではない³。しかし、思想的抽出の困難さはあるとしても、彼が無思

1 ハーバート・ノーマン「日本政治の封建的基礎」（大窪愿二編訳『ハーバート・ノーマン全集』第2巻、岩波書店、1977年）、257～258頁。

2 中島岳志『中村屋のボース』（白水社、2005年）、129頁。

3 松本健一『雲に立つ 頭山満の「場所」』（文藝春秋、1996年）、70頁。

想・無原則であったことにはならないのではないか。むしろ、彼には『思想がない』のではなく、その行動の源泉となっているものを、私たちが定義しづらい⁴ と言うべきであろう。

さて、頭山満とアジアに関する先行研究としては、趙軍による『皇アジア体制』をめざした興亜思想——頭山満の場合⁵ という優れた論稿がある。著者は頭山の興亜思想を「尊皇論」と「攘夷論」の二本柱からなるものと捉え、その最終目的は「皇道を世界に布く」ことにあったとしている。本稿も基本的にはこうした見方を踏まえつつ、頭山の対外思想を「皇^{すめら}アジア主義」と称することとする。それは、「皇国日本」をアジアに拡大しようとするという意味においてである。以下、本稿においては、かかる思想が如何なる政治的経験を基に生じてきたのか、そしてそれは如何なる特徴を持つものであったのか、更には具体的な実践活動として、中国とどう関わっていったのかについて論じていくことにしたい。

2 初期の活動——民権論から国権論へ

頭山満は1885年、福岡藩士である筒井亀策の三男として生まれた。幼名は乙次郎。後に母方の頭山家を継ぎ、名を満と改めた。16歳の時、女医にして儒学者でもあった高場乱の興志塾に入り、ここで後の玄洋社のメンバーとなる進藤喜平太や箱田六輔らと知り合うことになる。この塾では「区々たる読書の末節に拘泥する」ことを良しとせず、「志士的精神を磅礴するもの」であったと言われる⁶。在塾中の頭山の学習について、同学の記すところでは、「毫も章句に拘泥せず、而も其会心の所に至るや、反覆誦読、夜に繼ぐに晨を以てすると云ふ工合で、之を暗誦するに至らねば息まず⁷」というものであったとされる。そして、高場の不在時にあつては、浅見綱斎の『靖献遺言』を代講することもあったということである。評伝に基づく限り、頭山の尊皇思想の基礎はこの時期に作られたとすることができるであろう。

1875年から76年にかけて、全国的に征韓論、民権論が広まって行った。頭山満もその影響を受け、福岡に矯志社が組織されると彼はその一員となった。同社は、高知の板垣退助、萩の前原一誠、鹿児島⁸の西郷隆盛の私学校と連絡を取りつつ活動を行った。76年10月、萩の乱が勃発すると、矯志社はそれに呼応しようとしたが、事前に計画が

4 石瀧豊美『玄洋社 封印された実像』（海鳥社、2010年）、35頁。頭山の思想に関わる今1つの難題は、彼の言説には年代の確定ができないものが多いため、その思想と対外観の時期区分が殆ど不可能な点にある。そのため本稿では、彼の思想を生涯全体にわたるものとして、一般化した形で提示しておかざるを得ない。時期区分の問題については、今後の資料発掘と研究の進展を待ちたい。

5 趙軍『大アジア主義と中国』（亜紀書房、1997年）所収。

6 藤本尚則『巨人頭山満翁』（田口書店、1932年）、52頁。

7 同上、61頁。

頭山満とアジア主義

漏れて失敗に終わり、頭山、箱田六輔、進藤喜平太ら十数名の社員は国事犯嫌疑で捕らえられ監獄に送られた。77年、西郷隆盛らが決起すると、矯志社は同じ福岡の強忍社と共にこれに呼応して兵を挙げるが、これも失敗に終わり、指導者の越智彦四郎、武部小四郎らは斬罪に処せられ、約400名の同志が投獄された。この時、頭山らは獄中にあったため連座を免れ、西南の役が鎮圧されると共に釈放されて福岡に帰った。そして彼らは、越智、武部の遺志を継ぎ、「有為の青年を糾合して剛健なる団体を作」らんとして、博多湾頭に向浜塾（開墾社）を設立したのである⁸。

1878年5月、不平士族らによって、参議兼内務卿の地位にあった大久保利通が暗殺された。知らせを受けた頭山満は、板垣退助に決起を求めるべく高知に赴いた。しかし板垣は頭山に、「挙兵の到底政府転覆に可ならざる所以を説き、且つ大いに民権の伸長す可きを論じ有司専制の害を述べ、[中略]立憲政体民撰議院の利を語」⁹った。数度にわたる板垣との対談から、頭山は尊皇主義と民権論が相矛盾するものではないと理解し、同地にしばらく滞在して各地の民権家と交わった後、日本各地を歩いて民権論者との連絡に務め、福岡に帰った後は向浜塾を閉鎖し新たに向陽社および向陽義塾を創設し、子弟教育に務めることとなった。その趣旨書に「義塾は則ち教育を以て民権を培養するの地なり」¹⁰とあるように、彼らの結社は民権論を指針に据えたものであった。また、具体的な政治活動としては、箱田、進藤らと筑前共愛同衆会を組織し、国会開設、条約改正の請願などを行なっている。

1879年12月、玄洋社が設立され、社長には平岡浩太郎が就任した¹¹。そして、半年ほど経ってから以下のような「玄洋社憲則」が制定された¹²。

第1条 皇室ヲ敬戴ス可シ

第2条 本国ヲ愛重ス可シ

第3条 人民ノ主権ヲ固守ス可シ

第3条は後に、玄洋社自身によって「民権ヲ固守ス可シ」と改められるが、『玄洋社社史』が記すところでは、「実に之れ当時潮の如くに沸きし民権論より来る者」であって、「皇室敬戴」、「本国愛重」と矛盾するかのようであるが、藩閥政治・有司専制の政治においては尊皇維新の実は失われたに等しく、今ここで御誓文を奉じ公義輿論を興し民に政治に参与させることは、皇室を永遠に安固たらしむる所以であり、憲則の3ヵ条はそれぞれ矛盾するものではないとされたのである¹³。恐らく、頭山の認

8 同上、70頁。

9 『玄洋社社史』（玄洋社社史編纂会、1917年）、207頁。

10 頭山満翁正伝編纂委員会『頭山満翁正伝 未定稿』（葦書房、1981年）、70頁。

11 『玄洋社社史』を始め、多くの文献では1881年2月創立説を採っているが、ここでは石瀧豊美氏の考証に従った。『玄洋社・封印された実像』、123～130頁。

12 同上、126～127頁。

識もこれを超えるものではなかったと考えられる。また、憲則の「皇室」「本国」「人民」の順序を以て、「頭山らにとって、民権はすでに唯一の重要な目標でなく」なり、民権から国権に傾き始めたとする見方があるが¹⁴、当時においては、皇室や国家を先に置き、人民を後回しにするのはごく普通に見られたことであり、玄洋社にのみ特徴的なことではなかった¹⁵。

玄洋社は当初、福岡の一地方結社に過ぎなかったのであるが、1887年からの条約改正をめぐる問題で、同社は一躍世間の注目を浴びるに至る。条約改正問題は、日本にとって明治維新以来の懸案であり課題であった。1885年に成立した伊藤博文内閣（外相は井上馨）は、早速この問題に取り組んだのであるが、政府の外交姿勢と一般国民の考えとでは大きな開きがあった。すなわち、井上の案では税権の回復だけが目的とされており、法権については日本の裁判所に外国人裁判官の任命を約して、列国の同意を求めようとするものであったのである。これに対しては、朝野を上げての反対運動が起こり、1888年に伊藤内閣は総辞職した。続いて成立した黒田清隆内閣は、外務大臣には大隈重信を任用したが、条約改正案は井上案に部分的修正を加えたもの過ぎず、しかも極秘のうちに条約改正交渉が進められて行った。ところが、1889年6月、外交交渉の事実が『ロンドン・タイムズ』によって報じられるや、「屈辱条約改正」として以前にも増して反対運動が盛り上がることとなったのである。

条約改正案が伝えられると、玄洋社はこれを国家の一大事と考えて、中止に追い込むべく反対運動に取り組むことになる。箱田六輔、平岡浩太郎、進藤喜平太らは福岡にあって運動の勢力拡大を図る一方、頭山満は玄洋社を代表して東京に赴き運動に直接携わることとなった¹⁶。上京後の頭山は、松方正義や伊藤博文らと面談して反対論に加担するよう説得に当たっている。この運動には、急進的民権論者、国権主義者など広範な勢力が加わり、世論は大いに盛り上がりを見せた。しかし、黒田首相と大隈外相の改正方針に変化はなく、反対運動は行き詰まりを見せていた。そのような状況の中で、ある日の会議において頭山は立ち上がり、「屈辱条約の締結は断じてやらせてはならない。余は政府をしてやらせぬことに決めた」と発言した¹⁷。この発言は、引き続き生じる直接行動を暗示するものであった。果たして、彼はその後、大井憲太郎を訪ね、人を介して爆弾を譲り受けさせ、1889年10月における来島恒喜による大隈重信襲撃に供したのであった¹⁸。確かにこれは、玄洋社が政府の外交政策に影響を与えようとした最初の事件であった。

この時点で、頭山満が国権主義の立場を明確にしていたことを示す明確な証拠はな

13 『玄洋社社史』、226頁。

14 『大アジア主義と中国』、89頁。

15 『玄洋社・封印された実像』、276頁。

16 『玄洋社社史』、335頁。

17 葦津珍彦『大アジア主義と頭山満』（日本教文社、1965年）、35頁。

18 『頭山満翁正伝』、169～172頁。

頭山満とアジア主義

い。だが、彼が所属する玄洋社は大きな転換を遂げていた。社史の記すところでは、玄洋社は1886年8月に長崎に来航した清国北洋艦隊の兵士たちの乱暴狼藉を契機として、国権主義に転じたものとされる。曰く、「玄洋社社員等は之の国辱を聞いて、皆悲憤慷慨す、乃ち茲に民権伸長論を捨て、国権主義に変ずるに至れるなり。[中略]宜しく日東帝国の元気を維持せんと欲せば、軍国主義に依らざる可らずとし、国権大いに張らざる可らずとし、遂に曩の民権論を捨つること弊履の如くなりしなり」¹⁹。しかし、この文言は一種の口実でしかない。実際には、1888年1月における箱田六輔（第4代社長）の死後、進藤喜平太が社長となるに及んで、玄洋社は国権論に大きく舵を取り、吏党と提携する方向に傾いていったのが実態である。そして頭山が、吏党化への傾斜に不満を抱く箱田と、その死の直前に激論を交わしたという事実は²⁰、彼の政治的スタンスが玄洋社の主たる方向と同一であったことを示唆している。

さて、1890年11月、第1回帝国議会が開かれたが、政府と民党は衝突を繰り返し、翌年に至っても対立は解消されなかった。かかる官民衝突の事態を見て、頭山満は次のように述べていた。「民権固より重んぜざるべからず、然れども国権は更に之を一層重んぜざる可からず、我国は将来東洋の盟主たらざる可からず、而も其の天職を果さんとせば、宜しく軍備を拡張せざる可からず、民党議員は徒に感情に走せて事理を審かにせず、徒に反対せんが為に反対するが如き態度あるは、予の深く採らざる所なり」²¹。頭山は、ここに自らが国権主義の立場に立つことを明確に表明した。そして彼のこうした姿勢は、1892年の選挙干渉事件への伏線となるものであった。

1891年6月、山県有朋の後を継いで松方正義が内閣総理大臣に就任した。彼のもとで開かれた第2回議会では、海軍予算の拡張をめぐる民党と政府が鋭く対立した。更に、海軍大臣樺山資紀のいわゆる「蛮勇演説」があって議会は空転、12月には衆議院が解散され、翌年2月に総選挙が行われることとなった。この選挙では、内務省による大がかりな選挙干渉がなされ、死者まで出したことで知られているが、玄洋社も福岡での選挙において民党排撃に積極的に加わることとなった。当時、福岡の県令であった安場保和は、早くから頭山満と親交があり、松方は安場を介して彼に選挙介入を委嘱することとなった。松方は自らの軍備拡張論と、頭山の対外発展論・国威宣揚論が一致すると見たのである²²。後年、頭山は次のように記している。

自分は元来尊皇主義の民権論者であるが、二十五年の総選挙に際しては、過激主義者の団体を破壊せんとするを慮り、之れを黙視する能はず、熊本の国権党と相提携して、時の政府を掩護し、自由改進黨連盟の民党と闘ったものである。[中略]

19 『玄洋社社史』、408頁。

20 上村希美雄『民権と国権のはざま 明治草莽思想史覚書』（葦書房、1976年）、252～253頁。

21 『玄洋社社史』、414～415頁。

22 同上、419頁。

当時自分は東洋に於けるわが国威の失墜しつゝあるを慨し、対外進取の経綸を尽し時の政府をして自主的外交の方針を樹立せしめ、大いに国権を張らんことを期したものである²³。

頭山満の国権論への転換については、彼が民権運動の先駆者の一人でもあったこと、そして民党との因縁の深さ故に、それを惜しむ声もあったと言われるが、彼には彼の信念があったのである²⁴。すなわち、「国威失墜」への憂慮と「対外進取」の精神がそのモメントとなっていたのであり、ナショナリズムこそ彼を転換に駆り立てたものであった。「何でもよい、海軍拡張さえ出来ればよいので、私にしては吏党も民党もないのじゃ。国家の為めによければ、それでよいのじゃった」²⁵という言葉は、そのことを象徴的に現している。そして、政治的立場の転換はあったものの、民権・国権いずれの立場にしても「尊皇主義」を基礎としていたことには違いはなかった。その意味では、自由民権運動と国家主義運動は同根であったとも言えるのである。

『玄洋社社史』には、選挙干渉以後の頭山満について次のように記している。「頭山、松方等と結びしの不覚を悟り、之れより韜晦して、再び政界に出でず、眠れる獅子の如く、林中深く、其の姿を隠して、只天下を白眼視するのみなりき」²⁶。そして頭山は、アジア問題に積極的に関わって行くことになるのである。

3 皇アジア主義者としての頭山満

玄洋社はもともと、同志相依る極めてゆるやかな集団であった。そして、その大陸政策の特色は、アジア諸国の「近代化と独立達成」のために支援を行うことにあり、アジアの各国が日本と同程度に近代化し、他国の支配を脱して独立したなら、日本と提携して、経済的・軍事的な同盟関係を樹立することを望んでいた²⁷。これは、玄洋社が西郷隆盛の「征韓論」の流れを汲むことに起因していた。こうした観点から、玄洋社が最初に行った行動は、朝鮮の独立運動への支援であった。1884年12月、金玉均、朴泳孝ら朝鮮の独立党のメンバーは立憲君主制国家の樹立を目指してクーデターを企てた（甲申政変）。しかし、袁世凱率いる清軍によってクーデターは撃破され、金玉均は同志らと共に日本に亡命することとなったのである。

当時、東京の芝公園の付近を活動の拠点としていた玄洋社の社員（久田全、来島恒

23 『頭山満翁正伝』、195～196頁。

24 『巨人頭山満翁』、258頁。

25 頭山満（談）・薄田斬雲『頭山満直話集』（書肆心水、2007年）、137頁。

26 『玄洋社社史』、427頁。

27 西尾陽太郎「玄洋社の大陸政策」（『歴史教育』18-4、1970年4月）、67～68頁。

頭山満とアジア主義

喜、的野半介ら)は各地の同志と連携して、金玉均を援助して朝鮮に義勇軍を組織しようとして計画し、福岡にいた頭山満にも連絡し上京を促した。頭山は上京の途中、神戸で金玉均と会い、彼を有為な人物であると認識したが、玄洋社の早急な行動の主張に対しては「輕拳」を戒め、「妄動して名を汚すは真に国家の為に凶る者に非ず、宜しく自重すべし」²⁸として慎重論を唱えた。そして彼は、先ずは釜山に「善隣館」と称する語学学校を作り、これを拠点に独立党を支援しようとして主張した。しかし、この計画は大井憲太郎らによる大阪事件(1885年)の余波を受けて頓挫を来すことになる。そして、金玉均は日本政府による事実上の軟禁を経た後、1894年に上海で暗殺され、玄洋社によるアジア独立運動支援の第一幕は終焉したのである。

ところで、前章で見たように、頭山満は1890年時点でアジアにおいて日本が盟主たるべきことを述べるようになるが、80年代においては、日本と朝鮮が協力してアジアの独立運動を進めようとしていたと推察させる言説がある。例えば、頭山は金玉均と初めて会った際に、「日韓同胞論」を説き、「互いに相提携し相扶翼して覇を唱えざるべからず」²⁹と述べていたのである。然るに、朝鮮における改革運動の失敗は、恐らく頭山に協力対象としての資格を疑わせるようになったであろう。この後、そうした言説は一切見られなくなり、関心はむしろ中国やインドといった国に向けられることになるのである。

頭山満は既に朝鮮問題を契機として、アジアへの関心を示していたのであるが、彼の関心を更に深めたのは二人の人物であった。一人は陸軍軍人であり、日清貿易研究所の設立者でもあった荒尾精である。頭山が福岡に荒尾の訪問を受けたのは1886年春、彼が大陸に実地踏査に赴く直前のことであった。この時、荒尾はまだ28歳であったが、その非凡さを見て取ったのか、頭山は後年彼をして「真に偉人の器を具え、大西郷以後の大人傑であった」³⁰と最大級の評価を与えている。こうしたことを前提に、大川周明は、「少なくとも荒尾との親交が、(頭山)翁をして一層大なる関心を東亜問題に抱かしめるに至ったことは疑ふべくもない」³¹と述べている。しかし、如何なる点で頭山の関心が触発されたかについては定かではない。

これに比して、今一人の人物である近衛篤磨からの影響はより明確である。当時の日本の論壇においては、アジア・モンロー主義が流行を来しており、近衛もその有力な論者の一人として知られていた。彼はアジアの将来が人種競争の舞台となることを免れ得ないと予測し、その最終段階では黄白人種の闘いへと収斂して行き、その場合には日本人、中国人を問わず白人種の仇敵と見なされるだろうとして、同人種同盟の結成が必要であると唱えていたのである。頭山満はそのような主張について、「(近衛)

28 『玄洋社社史』、248頁。

29 『国権と民権のはざま』、247頁。

30 『頭山満直話集』、84頁。

31 大川周明(中島岳志編・解題)『頭山満と近代日本』(春秋社、2007年)、130頁。

公の大陸経綸の志、亜細亜問題に対する抱負は吾々の敬服する処であった」として、次のように述べていた。

「東洋は東洋人の東洋なり」と絶叫して起ったのは、霞山公が第一人者だ。／亜細亜民族が一致結束して起ち、西欧諸国の暴慢と其侵略的野心を駆逐せんとする、大亜細亜主義を提唱したのは公が其第一声である。公は米国のモンロー主義を引例して、亜細亜モンロー主義の実行と義務は、日本と支那の双肩に在りとして日支提携を説いた。其先見の明と達識雄図とは今更ながら敬服に堪へない³²。

頭山満の近衛に対する評価は絶大なるものがあり、その影響を受けた点も明確である。すなわち、日中提携を中心とするアジア諸国の連帯であり、それによって欧米勢力をアジアから駆逐することであった。アジア主義言説の展開過程からすれば、この点では頭山の主張は近衛のそれを越えるものではない。その意味においては、頭山を「近衛の忠実な追随者」³³ とする評価は当を得たものといえる。ただ問題となるのは、その核にある思想傾向とそのアジア主義への反映の度合いということであろう。

それでは、頭山満の思想的基礎は如何なるものであったのか。伝記には、頭山の思想系統は儒教を根幹として、これに神仏を取り入れて日本精神となしたものであり、更にそこには禅と陽明学が幾分加味されていると記されている³⁴。頭山は社会化の過程で儒教的教養を身に付けているので、これが根幹となったことは間違いないであろう。また、陽明学に関しては、彼が若い頃に読んだ大塩平八郎の『洗心洞劄記』を通してのことと思われる。しかし、現在残されている言説においては、彼が体系的に儒教を論じた箇所はない。彼は儒教こそ東洋人を人間らしい人間にした教えであって、その根本義は日本人の指導的要素であるとしているが、こうした捉え方は、極めて通俗的なものであると言わなければならない。ただ、儒教の徳目には幾つかのものがある中で、頭山が取り分け「忠孝」を強調している点には注目しておきたい。すなわち、日本人は身を忘れて人や国家に尽くすという「忠孝」の精神を、絶対に失ってはならないと指摘しているのである³⁵。ここから、彼にとっての儒教が、尊皇主義との関連で捉えられていたことが理解されるであろう。

然るに、頭山満の言説においては、日本文明の根幹となったとされる儒教よりも、むしろそれを基礎として形成されたとされる「日本精神」の方が、強烈なインパクトを以て現れる。頭山の考えでは、今日にあっては、武士道は治者・被治者双方を貫く

32 吉田頼明『巨人頭山満翁は語る』（感山社、1939年）、115頁。

33 『大アジア主義と中国』、95頁。

34 『頭山満翁正伝』、11頁。

35 中野刀水『頭山満翁の話』（新英社、1936年）、5頁。

頭山満とアジア主義

日本国民全体の精神でなければならない。そして、それによって維持されるべき国家は天竺道を特徴とするものである。ここで頭山が言う「天竺道」とは神格化された天竺制イデオロギーを意味しているのであるが、彼はそれについて次のように述べる。「日本は魂立国の国じゃ。君民一如、皇道楽土の国柄だ。日本の天竺道位尊くまた洪大無辺なものはない」。このような国は普遍性を持つものである。それ故、「日本の天竺道は只だに日本国土を治め大和民族を統べ給ふのみならず、実に全世界を救う大宇宙を統ぶるものだ。而も日月の普きが如く、偏視なく偏愛なく所謂一視同仁じゃ」とされる。そして、彼の考えるところでは、天竺道はあらゆる教えの究極に位置するものである。すなわち、「孔子の曰ふ祭政一致、宇宙一貫の道理も、釈迦の欣求浄土も、クリストの愛も、畢竟するに天竺道の一部だ」と言うのである³⁶。

頭山満は、儒教はもとより、武士道、天竺道についても深く掘り下げて論じていたわけではない。むしろ、それらは感覚的に捉えられていた感がある。そして、具体的な根拠を示すこともないまま天竺道に最高の価値が付与される。すなわち、儒教には日本精神の根本をなすものという位置づけが与えられていたが、他方、天竺道は普遍的価値を有するものとして認識されていたのである。それ故、天竺道は日本を越えてアジアに、そして世界へと拡大されるべきものと考えられている。彼は次のように述べている。「天子様は世界に上御一人だけだ。実に日本の天皇陛下に依って、皇道を世界に布くことが、神意であると信じて居る。其処に世界民族も亦その堵に安んじ、所謂世界を挙げて皇道楽土が招来されるのである」³⁷。これこそ、頭山の皇アジア主義の原理となるものであったのである。

それでは、頭山満は西洋文化に対してどのような考えを持っていたのであろうか。1925年9月に『ジャパン・アドヴァタイザー』紙による頭山のインタビューから、当時の彼の姿勢を知ることができる³⁸。彼はここで、「東洋が泰西文化に接触して以来、日本国民の犯したる最大の過誤は、唯だ無鉄砲な態度を以て西洋の物質的教訓を採用した事である」と欧化の傾向に批判的姿勢を示す。然るに、多数の思慮ある人々はこの過ちを自覚するに至り、国民として自己を反省し、その取り入れた西洋思想を、国民精神を基礎として矯正すべきと考えるに至っている。だが、西洋の文化の中には既に日本の中に深く入り込んでいるものもあり、今となっては捨てるものもある。そこで、頭山が示したのは、「孔子の教ふる忠孝の根本義を紊るが如き外来思想は堅く之を防止しなければならぬ」と言うものであった。西洋文化に対する頭山の姿勢は、忠孝の精神を最低限の防衛ラインとするものであって、決して盲目的な排外主義ではなかったことが理解される。

以上のような思想傾向の延長線上に対外観・体外思想があると考えられるのだが、

36 『巨人頭山満翁は語る』、11～12頁。

37 同上、418～419頁。

38 『巨人頭山満翁』、499～500頁。

頭山満の場合は玄洋社の対外観をそのまま体現したかのように、先ずは西郷隆盛の征韓論を原点とするものであった。言うまでもなく、西郷の対朝鮮政策は決して「征伐」の如き荒療治を主張するものではなく、平和裡にアジアを結束させて西洋の侵略を阻止するという穏やかな政策であった。頭山は、「明治初年すでに大東亜の建設を志し韓清と親善して露国の南下を抑へやうとしていたのが南洲一派だ」³⁹として、西郷を高く評価している。そして、国家の外交姿勢として、頭山は「強国にして正義」が理想であるとする。彼は西郷の遺訓に対する講評で次のように述べている。

強国にして正義、即ち南洲翁がいはれたやうに、広く弱小国を憫れんで、それぞれ文化を進めしむるのが、之が国を為すの理想といふものではないか。たゞ人の国を征伐して、之を略奪し、苛斂誅求して他の弱小国民を苦しめる丈ならば、何も国を作って居る必要はないのぢや⁴⁰。

更に頭山満は、日本は世界の「道義の大本」とならなければならないと言う。これこそ、日本の国家たる使命なのである。そして、近いところで中国、インドと提携して、仁義道徳の理想国を作るべきであるとする⁴¹。ここに、道徳を基礎としたアジアの連携が唱えられたのである。ここで示された中国とインドは、日本とともにアジア独立運動の中心となるメンバーであった。この両国を道義によって感化し、「見事に日本の片棒を担ぐ様にさせた時、始めて東亜の建設が出来る」⁴²と考えられていたのである。インド問題に関しての具体的な関与としては、1915年におけるラス・ビハリ・ボースへの支援活動があったことは良く知られているところである。しかし、インドへの関わりはそれ以上深まることはなかった。むしろ、次章で見ると、頭山のより大きな関心は中国に向けられていくのである。

頭山満の考える日本と中国は「日支一家」の関係と称せられるが、それは家族と言うよりも、むしろ夫婦の関係に例えられる。彼は次のように言う。

日本と支那とは数千年来、同文同種、地理的にも、民族的にも、人情的にも提携融合しなければならぬ立場にある。[中略] 日本と支那とは天の与へた夫婦も同様だ。夫婦は諸外国が羨む位仲がよからねばならぬ筈だ⁴⁴。

日本と中国は一心同体の関係であってこそ、列強諸国のアジア侵略に対処し、それ

39 『頭山満翁正伝』、88頁。

40 頭山満『大西郷遺訓 立雲頭山満先生講評』（政教社、1925年）、53頁。

41 同上、99頁。

42 鈴木善一『興亜運動と頭山満翁』（照文閣、1942年）、79頁。

43 『大アジア主義と中国』、101頁。

44 『巨人頭山満翁は語る』、412頁。

頭山満とアジア主義

らをアジアから放逐することができるのであった。その前提としては、中国が弱小国の状態から脱することが必要である。現在の中国は、恰も獅子や虎が檻の中に閉じ込められている状態と同じで、実力を全く発揮することができないでいる。中国と提携するためには、彼らを先ず檻の中から開放してやる必要があるのである。そして、両国が本当に一緒になって事に当ることができるようになれば、イギリスもアメリカも敵うものではない⁴⁵。彼らはいずれ、アジアから撤退せざるを得なくなるのである。それでは、中国を檻から出してやるのは誰かと言えば、それは明らかに日本にその役割が求められていたと言うべきであろう。日本は中国に対して、主導的立場にあったと考えられるのである。

先に述べたように、頭山満は日本・中国・インド——後には満州もそこに含まれるようになるのだが——が中心となってアジア解放に立ち上がるべきだと考えていた。彼は、東洋から西洋人を駆逐するのは人類を救うためであるとし、「東洋の独立に依って人類の真の文明を作って、従来 of 獣の文明から人類を救済する」のだと述べている⁴⁶。「人類の真の文明」とは、彼の言説の全体から推して天皇道以外には考えられないのだが、このことの実現のためには「攘夷」が必要であった。「日本だけでなしに、今度は亜細亜が一体になって攘夷をするのぢゃ。攘夷と同時に皇道を世界に布く大建設ぢゃ。攘夷はその大前提、これが亜細亜の大維新ぢゃ」⁴⁷。ここからは、アジア諸国による攘夷によって、西洋諸国はアジアから駆逐され、その空間に日本の統治イデオロギーが充填されるという構図が浮かび上がってくる。然るに、そこではイデオロギーの普遍性あるいは正当性の検証がなされた形跡は全くない。天皇道は無条件的に真理とされていたのである。

このように、頭山満はアジア諸国の連帯を説くのであるが、それは日中関係のあり方からも想像されるように、決して対等の関係に立ってのものではなかった。西洋諸国に対抗するためにはアジア諸国は団結すべきであるが、そのためには日本がアジアの盟主とならなければならないと、頭山は論じているのである。ある論者は次のように指摘する。「翁の大陸政策は五十年来一貫して居る。吾が日本が東洋の盟主として隣邦と互助聯環東亜全体を日本の皇道に化せしむること。東洋を打って一丸とせる皇道楽土を建設しやうと云ふのが、翁の理想のやうだ」⁴⁸。すなわち、頭山の理想は日本の指導の下での「皇アジア」の建設と、更に進んで「皇世界」の建設であった。頭山の脳中には、「皇室敬戴」と「国権拡張」という二つの観念が深く刻み込まれていたのであるが⁴⁹、これらこそ彼の皇アジア主義を支える要素であったのである。彼の中

45 田中実『頭山満翁語録』（皇国青年教育協会、1943年）、132頁。

46 『頭山満翁の話』、14頁。

47 『興亜運動と頭山満翁』、24頁。

48 『巨人頭山満翁は語る』、341頁。

49 『頭山満翁の話』、338頁。

国革命への関与は、以上のような対外思想に基づいていたのである。

4 中国革命と頭山満

頭山満が孫文と最初に出会ったのは、1897年のことである。孫文はイギリスでの亡命生活を終え、カナダを経由して日本に渡っていたが、この年の9月初旬、滞在中の横浜で宮崎滔天と会い知己となっていた。宮崎は日本人の中での孫文の最初の同志である。当時、日本政府は清朝に配慮して、孫文の滞日を好ましくないと考えていたため、宮崎は平山周と孫文の処遇について相談し、次いで犬養毅に話を持ちかけたところ、犬養は強引に外務省の許可を取り付けて東京に家を借り、平山の語学教師の名義で滞在することとなった。「これが孫文及び支那革命と日本志士との結合の嚆矢」⁵⁰であった。頭山もその年、宮崎を介して孫文と相知ることとなったが、伝記にも「頭山も一見して傾倒した」⁵¹と記されており、革命派の中では孫文を特別視するようになったとされている⁵²。

日本のアジア主義者は中国の反政府勢力の結集に熱心で、宮崎、平山らは戊戌変法失敗後の康有為グループにも同情的で、日本に亡命させて後、孫文らと共に闘わせようとしたことがある。この試みは康有為側からの拒否に遭って失敗に終わった。1905年の孫文の訪日に際しては、彼と黄興とを結びつけることに尽力し、この時は7月の中国同盟会の結成に至らせることができた。また、大陸浪人の中には、直接大陸に渡り革命派の活動に参加した者も少なからずいた。しかし、頭山満はそうした試みや活動に加わったことはなかった。武昌蜂起以前においては、大陸浪人を指揮して中国革命に参加したのは主に内田良平であり、孫文と頭山の関係は決して多くはなかった⁵³。そのような中で、唯一確認できる記録は、孫文からの蜂起のための資金援助の依頼であった。すなわち、頭山は一時炭鉱の売買に携わり、夕張炭鉱の売却によって75万円という財産を手にしていたことがある。そこへ、鎮南関での蜂起を計画していた孫文が、犬養の紹介によって資金の援助を求めて訪れたことがあったのである。しかし生憎、金は既に使った後であったため、孫文の期待には応えることはできなかった⁵⁴。実現しなかったとは言え、これが頭山の中国革命との最初の関わりであった。

頭山満が中国革命に本格的に関与するようになるのは、1911年の武昌蜂起の勃発後

50 『頭山満翁正伝』、243頁。

51 同上。

52 なお、中国革命派を匿う費用は、殆どが筑豊の炭鉱主が貢いだ金によるものであった。孫文の場合は、最初の生活費は平岡浩太郎が出したが、彼が没落して以後は、後の辛亥革命に至るまで、その大部分を安川敬一郎がカバーしたと言われている（古島一雄『一老政治家の回想』、中央公論社、1975年、109頁）。

53 李吉奎「孫中山と頭山満交往述略」（『中山大學學報（社会科学版）』、2006年第6期）、31頁。

54 『巨人頭山満翁』、311頁。

頭山満とアジア主義

のことである。当時、武侠の精神に燃える志士浪人たちは相継いで革命軍の支援にかけ、且つ国内の一般世論も極めて革命軍に同情的な姿勢を示していたのであるが、日本政府の態度は混沌としており殆ど決定するところが見えない状態にあった。というのは、この時は桂内閣から西園寺内閣への替り目に当たり、新たな外相に任じられた内田康哉は長らくヨーロッパやアメリカの駐箚大使であったため、中国情勢には疎くなっていた。また、時の駐華公使の伊集院彦吉は袁世凱と親密な関係にあり、袁との関係を基準にして中国の時局を考察し、対策を講じようとする傾向にあったためである。そして何よりも、山県有朋を中心とする元老が、隣国に共和政体が実現することを好まず、むしろ革命鎮圧論を以て西園寺内閣を牽制したためであった。このような風潮の中で、頭山は「お隣の支那が共和国になったからとて、我が国体に影響を及ぼすなどと心配するのは自ら我が国を侮るやうなもの」⁵⁵ だとして、中国革命を積極的に支援する姿勢を示した。彼は天皇道を基本とする国体の揺るぎなさに強い確信を抱いていたのである。

武昌蜂起勃発後、日本では大陸浪人を中心とする様々な団体が結成されると、頭山満はそれに積極的に関わっていくことになる。10月17日には、彼をはじめ内田良平、三浦梧楼ら300余名が集まって「浪人会」が開かれ、政府に「厳正中立」政策を採るよう申し入れることを決定した。11月上旬には、内田、小川平吉、古島一雄らと共に「有隣会」を組織し、革命派支援の運動方針を確定した。同会は、既に北京にいた平山周、武漢に在った末永節と連絡を取り、中国の情報の収集に努めていた⁵⁶。また、12月下旬には東亜同文会の根津一らが中心となって「善隣同志会」が組織されると、頭山もこれに名を連ねていた。同会が採択した決議は、革命軍の行動に干渉しないように列強諸国と日本政府に呼びかけ、中国革命を支援する立場を表明した点で注目に値するものがあつたとされる⁵⁷。

漢陽が陥落する3日前、当地に在った萱野長知はアメリカ滞在中の孫文に帰国を促す電報を打った。「早く帰って収拾してくれぬと黄と黎だけではいけぬ、大将来れ、統帥なければ大事の成就に妨げあり」という内容の電文であつたと言う。萱野は同時に、頭山や犬養毅に「天下を取っても後の方法がつかぬから誰か来てくれ」という主旨の電報を打って、来援を要請した⁵⁸。当時、中国の動乱に乗じ、日本の不良浪人が革命援助に名を借りて多数入り込み、中国革命派だけでなく日本の心ある志士たちも非常に迷惑を被っていた。そこで、大陸浪人の中の不良分子を押し鎮める必要性と、孫文らと会談して忠告を与える必要性から、三浦梧楼の薦めもあって頭山と犬養を中国に派遣することとなった⁵⁹。そして、彼らのもとに「渡清団」が作られ、12月19日

55 藤本尚則『頭山満翁写真伝』（葦書房、1985年）、23頁。

56 『東亜先覚志士記伝（中巻）』、463～464頁。

57 『大アジア主義と中国』、114頁。

58 『東亜先覚志士記伝（中巻）』、428～429頁。

には犬養らが、同月25日には頭山らが上海に向かったのである。頭山が一行を連れて上海に到着すると、「大小の浪人連、頭山の名に恐れ皆慄伏して、完く其影を南清より消す」⁶⁰ 状態になったと言われる。

1912年1月、中華民国臨時政府が成立するが、それと同時に南北妥協の空気が醸成されて行くこととなった。しかも、孫文は2月14日に参議院に大總統の辞表を提出し、後任に袁世凱を推す旨を表明し、自らも袁の招請に応じて北上するとしていた。中国に渡って間もない頭山満もそのことを知り、即座に南北妥協反対の態度を示し、孫文の北上に対しては、「それは以ての外である。孫が北京に乗り込むとなると、下手をすると殺されるかも知れぬ、決して行ってはならぬ。反対に袁を南京に呼び寄せるがよい」⁶¹ と述べ、孫文との会見を求めて宮崎滔天、萱野長知と共に南京に向かった。そして、当地にいた寺尾亨を交えて孫文と面会し、北上反対の意見を表明した。彼らの発言の主旨は、孫文らが「革命の主人公」であるという地位を決して譲ってはならないというものであった⁶²。結果として孫文は北上することはなかったが、袁世凱も北京での「兵変」を口実に南下することはなかった。その後、頭山と犬養毅は武昌に黎元洪を訪ねて妥協反対を説いた。また、犬養は革命派の人材不足から岑春煊を担ぎ出し、孫文との合作を図っていたが、これは孫文の拒否に遭って失敗に終わっている。

頭山満が孫文と袁世凱との妥協に反対だった理由は、中国が孫文のもとに統一されてこそ日中提携の可能性が高まると考えたからにはほかならない。頭山は、かつての金玉均暗殺以来、袁世凱には強い不信感を抱いていたと言われる。しかも、袁は辛亥革命以前特に朝鮮駐箚時には日本の朝鮮への拡張策に対抗した経歴を持つ人間でもあり、そのような人物に孫文が権力を譲り渡すことは、日本の得策ではないと考えたことは理の当然であった。むしろ、親日的姿勢を採る孫文のもとに革命が貫徹され、統一国家が樹立される方が、今後の大陸政策に有利なものと考えられたのである。

しかし、最終的に中国の南北講和は成立し、頭山らの望むところとはならなかった。さしたる収穫のないまま帰国した頭山は、松本楼で開かれた歓迎会で辛亥革命について聞かれた際、「支那の今度の革命は膏藥療治ぢゃ。本当の切開手術をしないから、今に見ろ、また処々に吹き出物がするよ」⁶³ と述べた。彼の予言はすぐに現実のものとなる。すなわち、臨時大總統の地位を手にした袁世凱は、1913年3月の宋教仁暗殺を始めとして、国民党を様々な形で挑発し、第2革命の発生を見たものの、即座にこれを鎮圧し、独裁体制への道を進み始めたのである。そのような状況の中で、戦いに敗れた孫文は再度亡命先を日本に求めることになる。

59 『巨人頭山満翁』、397頁。

60 『玄洋社社史』、583頁。

61 『巨人頭山満翁』、410頁。

62 『頭山満翁正伝』、247頁。

63 『東亜先覚志士記伝（中巻）』、479頁。

頭山満とアジア主義

1913年8月9日、孫文は福州から台湾、門司を経て神戸に到着した。しかし、時の日本政府（山本権兵衛内閣）は、袁世凱政府に配慮して孫文の上陸を許可しない方針を取った。孫文は船中から萱野長知に電報を打って救援を依頼した。電文は、「遠く外遊することは我党の前途の為め都合が悪い、是非共日本に滞留したい、就ては神戸の船中で密会協議したい」⁶⁴ という内容であった。萱野はこれを受けて、犬養と頭山に相談したところ、頭山は「窮鳥も懐に入れれば獵師もこれを殺さず」の例えから救援を約束し、古島一雄に神戸に行って孫文の上陸を実現するよう依頼した⁶⁵。この時の頭山は、「今は袁の世の中であっても、将来は孫の時代が来る」⁶⁶ ことを確信していたのである。結果として、孫文は萱野、古島の尽力によって上陸を果たし、入国許可はその後の犬養と政府との交渉によって下りた。孫文は、直ちに東京に向かい、頭山邸の隣家（海妻猪勇彦宅）に約半年間隠れ住むことになる。以後、1916年5月に日本を去るまでの第2次亡命生活は、以上のような頭山の援助がなければ有り得なかったのである⁶⁷。

1921年11月、ワシントン会議が召集された。当時、頭山満はこの会議を「国難」と捉え、日中関係の悪化をもたらす可能性を持つものと考えていた。頭山はこの会議の目的が日本と中国を引き離すことにあると見なした。彼は次のように言う。

今度の会議の目的も期する所も畢竟日本と支那とを引き離さうとするに在る。元来アメリカの日本に恐るゝ所は、日本が支那から豊富なる資源を得ることにある。これ故日本を支那から切り離すことが彼等としても急務である。その上でユックリと両者を別々に料理しようと云ふのがアメリカの肚ぢゃ⁶⁸。

頭山満の見るところでは、アメリカの巧みな懐柔策によって、今や中国の人心は日本を離れ英米に頼ろうとしている。これに加えて、日本も中国に対して拙劣な外交を展開してきたとする。山東の利権の如きはすぐに中国に返還しておけば良かったし、資本も十分につき込んでおけば良かったのである。ところが、「日本人の吝な了見を疑はれて山東問題は変にこぢれて来るし、アメリカの投資には負けて、如何ともする事の出来ぬ破目に陥って了った」⁶⁹ とし、この期に及んで山東半島の利権を返還することになれば、それは中国とアメリカにもぎ取られることも同然であると述べている。

事実、会議が召集されると、中国には山東利権の回収の機運が高まり、遼東半島返還の要求まで起こってくる。1923年3月には、駐日公使が「21カ条」の廃棄を通告す

64 萱野長知『中華民国革命秘笈』（帝国地方行政学会、1940年）、198頁。

65 『一老政治家の回想』、119頁。

66 『頭山満直話集』、172頁。

67 「孫中山与頭山満交往述略」、35頁。

68 『巨人頭山満翁』、474頁。

69 同上。

るまでに至る。こうした対日ナショナリズムの高まりの中で、頭山満は28日に開かれた「対支有志会」において、「日本国民は大正4年の日支条約に対し今後支那が如何なる態度に出づるも断じて其の廃棄を許さず」との意見を表明し、その後排日運動が続き、長沙事件が発生すると7月16日には「対支聯合会」を開き、中国側の反省を促すと共に、「帝国は自衛の爲め適宜の処置をとるべき旨を申し合わせた」のである⁷⁰。彼は日本外交の失策については認めるものの、ここからは中国のナショナリズムを理解しようとする姿勢は全く見て取ることはできない。これは頭山の最大の問題点であったと言うべきであろう。こうした姿勢の延長線上に、以下に見るような1924年における孫文との最後の会談があったのである。

1924年10月、北京政変が発生し、11月1日には馮玉祥、胡景翼らが孫文に北上を要請する旨を打電した。これを受けて、孫文は北京に行くことを決断し、10日には「北上宣言」を発した。17日、孫文は上海に到着し、当地で日本訪問を決意することになる。帰国して間もない李烈鈞の勧めがそのきっかけとなった。すなわち、孫文から北上についての意見を求められた李が、一旦日本に渡って、頭山、犬養らと会談することが北方での交渉に有益であると説いたのである⁷¹。そこで、孫文は船中から頭山を始め政府当局、政党指導者宛てに「此度弊国時局収拾の爲め特に神戸を経て北京に向かふ。東亜大局につき御相談したし、神戸まで御来駕あらば幸甚、尚ほ朝野諸賢に御伝声を乞ふ」⁷² という無線電信を送った。船が11月24日に神戸に着くと、孫文は頭山に来神を促す電報を送り、それを受けた頭山は東京から神戸へ向かうこととなったのである。この時、孫文が頭山に不平等条約廃棄の主張への支持を求めていることは確実である。現に頭山の態度如何によっては、政界の動向が変化を来すことも十分予想されるところであった。しかし、国権派アジア主義者の間では満州問題の処理の仕方が懸念されていた。そこで、黒龍会の内田良平は事前に頭山に対して、「満州問題については、確りと一本釘を打ってもらいたい」と熱心に勧告していたのである⁷³。

頭山満と孫文の会談は、11月25、26日に神戸のオリエンタルホテルで行われた。会談の場には孫文の側から李烈鈞、戴季陶のほか山田純三郎がおり、日本側では犬養毅の使者としての古島一雄、頭山門下の藤本尚則（東京朝日新聞記者）等がいた。25日の会談で、孫文はアジア諸国の提携の必要性を述べつつ、「支那が従来諸外国との間に結べる旧条約を一切撤廃すべき希望を力説した」。恐らくこの発言は、頭山が想定したものであったであろう。そこで頭山は、満州における特殊権益は将来中国の国情が大いに改善され、他国の侵害を受ける懸念のなくなった場合は還付されるべきであるが、「目下オイソレと還附の要求に応ずるが如きは、我が国民の大多数が之を承

70 同上、475～477頁。

71 「李烈鈞將軍自伝」(章伯鋒・顧亜編『近代稗海』第9輯、四川人民出版社、成都、1988年)、74頁。

72 『巨人頭山満翁』、518頁。

73 『大アジア主義と頭山満』、171頁。

頭山満とアジア主義

知らないであらう』⁷⁴と述べたのである。翌日の会談では、藤本が満蒙の既得權益、具体的には旅大回収問題についての考えを質した。孫文はこれに答えて、「旅順大連の回収権といふ所までは考へてはゐない」とし、この問題が「現在出来上がって居る以上に、更に其勢力が拡大する場合は問題になるが、今の通りの勢力が維持される以上、問題の起ることはない」⁷⁵と述べ、現状維持の姿勢を示したのである。

会談に同席した藤本尚則は、「動もすれば日支間の重大危機を孕まんとした旅大問題は斯くて両雄の談笑裡に無事平穩なるを得た」と記している。そして、「その代り孫氏は翁に望むに治外法権の撤廃と関税自主権の回復に於て日本が支那のため列国に率先して斡旋されんことを以てし、翁は其の要望を至当なりとし、能う限りの尽力を為すべき旨を答へた」とされる⁷⁶。この会談の時の頭山の発言が、孫文の不平等条約撤廃の内容を治外法権の撤廃と関税自主権のみに限定させる効果があったことはほぼ確実である。現に孫文は、11月28日に行われた「大アジア主義」講演の中では、満蒙の日本の權益問題については全く言及しなかったのである。しかし、孫文の言動においても、前年4月に旅大回収闘争を抑制しても日本との関係をつなぎとめようとする姿勢を示していたことが確認されている⁷⁷。こうしたことを勘案すれば、孫文の側からすれば、頭山との会談で日本の世論の瀬踏みを行ない、以前から設定していた最大限の譲歩ラインを確認したものと言えるかも知れない。

孫文との会談に現れた頭山の姿勢、そして以前からの彼の言説の端々を捉えて、多くの論者は頭山の「侵略的野望」を強調する傾向にある。例えば、頭山が辛亥革命直後に中国を訪れて帰国する際に、満州の平原を眺めて「大分広いねえ、之れは日本が取ってやらにゃ、支那ちゃ始末が悪からう」⁷⁸と述べたことは、その証左としてしばしば言及されるところである。しかし、そもそも孫文が以前は満州を放棄するつもりでいたことは明らかである⁷⁹。だが、国内でのナショナリズムの高まりの中で、孫文がその革命的指導者であろうとするなら、そのような姿勢を維持し続けることはできなかった。彼は国内の事情から従前の立場を変えざるをえなかったのである。

こうした事情を知る日本の国権主義者は、孫文に予め「釘を打つ」ことを当然のことと考えていたのではないか。これに対して、何よりも日本の支持の獲得を求める孫文にとって、それは妥協できない要求ではなかったと考えられる。それ故、孫文が会

74 『巨人頭山満翁』、524～525頁。

75 同上、526頁。

76 『頭山満翁写真伝』、26頁。

77 「旅大回収運動ノ広東学生団体ニ対スル孫文ノ訓示ニ関シ報告ノ件」(1923年4月3日)、外務省編『日本外交文書』大正12年第2冊、日本国際協会、1979年、240～241頁。

78 『巨人頭山満翁』、402頁。

79 例えば、1906年、ロシアのある亡命革命家が中国革命成功の暁にはロシア革命を援助して欲しいとの要請に対し、「自分は万里の長城以外の事は関係せぬ」と述べて断ったことがあり(『中国革命秘笈』、86頁)、また1920年代初頭にも「将来国民党が支那を支配する暁には満州は必ず日本に委任する」とも述べていたのである(佐々木到一『ある軍人の自伝』、普通社、1963年、93頁)。

談の際、頭山にソビエト・ロシアへの理解を求めつつ、日中が一体となってインドを独立させ、アジアからイギリスの勢力を駆逐するには、「日本の陸海軍を強大にしてもらひ、それでやるよりほかはありません」と述べたことは⁸⁰、あながち政治的な空世辞とは思えないのである。皇アジア・皇世界の実現を求める頭山にとっては、中国ナショナリズムの昂揚に理解を示すことは不可能であった。それを知った孫文は、日本の支持の獲得による日中ソ提携という国際戦略の実行に向けて⁸¹、利権回収という民族的課題を一時的に棚上げして、日本の国権主義者との妥協を図ったと考えられるのである。

5 おわりに

本稿では頭山満の初期の行動の軌跡を踏まえ、その思想的特徴を検討したうえで、1920年代半ばまでの中国革命への関わりについて論じてきた。本稿で明らかにされたのは以下の諸点である。

頭山満は民権論者として出発したが、玄洋社の政治的立場の転換に歩調を合わせるかのように、国権論の立場に移行した。彼にとっては、国家の増強こそが何者にも優先されなければならないと考えられたのである。そして、彼自身の語るところでは、「国威失墜」への憂慮と「対外進取」の精神がその主たる動機となったのであった。この二つの要素は、彼の対外思想およびアジア問題への関与の基礎となったと見ることができよう。

頭山満の対外思想は、日本が盟主となってアジア諸国を連ねて欧米列強の勢力をアジアから駆逐するという意味では、19世紀末から20世紀初めにかけてに盛んに唱えられたアジア・モンロー主義の範疇に属するものである。然るに、頭山の場合、それを支える思想的基礎が儒教と天皇道であった点で特徴的である。儒教は日本精神の根幹になったと頭山は言うが、それは「忠孝」が強調されるが故に、天皇道と矛盾なく併存し得たのである。そして彼は、日本・中国・インドが中心となってアジアを解放すべきだと考えていたが、そこには文化的相対主義の観点は殆ど見られず、普遍化・絶対化された天皇道の普及によって「皇アジア」更に進んで「皇世界」の実現が求められたのである。

頭山満と中国革命との関わりは、主として孫文との関係を通して生じたものであった。孫文の日本での亡命生活に関しては、頭山の支援には多大なものがあった。辛亥革命に当たっては、孫文支持の立場から袁世凱への権力移譲に反対したが、現実のパ

80 田中稔『頭山満翁語録』（皇国青年教育協会、1943年）、82頁。

81 孫文のアジア主義と日中ソ提携論については、拙稿「孫文のアジア主義と日本——『大アジア主義』講演との関連で——」（『法学研究（慶應義塾大学）』79-4、2006年4月）を参照されたい。

頭山満とアジア主義

ワーゲームの中では何ら成果をあげることができなかった。それは、現実政治の中での浪人の限界であったと言えよう。頭山と孫文の最後の接触は、1924年11月の神戸においてであり、それは日中ソ提携論を特徴とする孫文のアジア主義と頭山の皇アジア主義の一瞬の交錯であったと言える。結局、会談では孫文が頭山の利権維持の姿勢に妥協するのだが、これを以て孫文が頭山に失望したということはあるまい。確かに、頭山は中国のナショナリズムを正当に理解することはできなかったが、孫文の側にも、利権問題を棚上げする準備はできていたと考えられるからである。過去の多くの論者がそうであったように、孫文の「大アジア主義」を理想化することによってでは、彼の現実主義的側面はおろか、頭山らとの関係も十分には見えてこないのではないかと思われるのである。